

最新！宗教情報 // No. 3

◎建設的な形で人々を刺激 「天使と悪魔」のロン・ハワード監督 (一部省略)

【読売新聞、05/02】5月15日に世界同時公開される「ダ・ヴィンチ・コード」の続編「天使と悪魔」でメガホンを取った、ロン・ハワード監督のオフィシャルインタビューが届いた。

ダン・ブラウンのサスペンス小説「天使と悪魔」が原作。前作に続き、秘密結社イルミナティの真実を探る宗教学者、ロバート・ラングドン教授(トム・ハンクス)が主役。「宗教と科学」の対立を題材に据えたハワード監督は、タブーと言われてる史実を映像化する難しさや、撮影での苦勞を語った。

Q. 本作の映画化はいつ決まったのでしょうか。

A. 『ダ・ヴィンチ・コード』の撮影最終日、僕はロバート・ラングドンの冒険を続けたくてしょうがなかった。『ダ・ヴィンチ・コード』は、作っていてとても面白く、非常にエキサイティングな作品だった。その後、『ダ・ヴィンチ・コード』が世界中で大ヒットしたことで、スタジオも関心を持った。それで僕の夢がかなったんだ。

Q. 前作に引き続き、イルミナティや教皇の殺人など、タブーと言われていることに挑んでいるが、それを映像化する上で難しかった点はありますか。

A. 『ダ・ヴィンチ・コード』や『天使と悪魔』のように論争を呼ぶ要素がある作品を引き受ける前に、監督としてはまず自省しなければならない。「その論争を呼ぶアイデア、ショッキングなアイデアは、建設的な形で人々を刺激するだろうか」ってね。『天使と悪魔』は、ジェットコースターのようなエキサイティングでサスペンスに満ちた面白い作品であるだけでなく、人々の想像力を刺激し、問題提起をしたり、対話を促したりする建設的な作品なんだ。

Q. 最後の質問です。物質と反物質、宗教と科学といったように、一見相反すると思われたものでありながら、実は表裏一体で同一線上にある、というのが原作の大事なテーマだと思いますが、監督にとってそういった出来事や発見はありますか。

A. 僕自身は、科学と信仰の間のプレッシャーは見えない。でも多くの人たちにはそれが見える。何百万人ものアメリカ人にとって、論争を呼ぶ問題だということはわかっている。彼らは、科学の発見の多くに異をとらえていて、たとえば、そういったことを学校で教えてほしくないと考えている。論争を呼ぶアイデアだからこそ、ドラマとしての可能性を感じた。その問題をテーマの一つとする現代的なスリラーというのは面白いと思った。もう一つ原作で面白いと思って映画に盛り込んだのは、遠い昔に抑圧された人々の思いがずっとくすぶっていて、それが現代に再び浮かびあがってきて危険な破壊行為にいたるといったアイデアだ。それも面白いアイデアだ。また、ダン・ブラウンが、君や僕と同じようにアクションや犯罪捜査に無関係な男ロバート・ラングドンを主人公にしているというのも気に入っている。彼は、特異な技能を持っていることで、突然、非常にユニークな謎に包まれたスリリングな状況に陥る。そんな冒険に巻き込まれ、危険に直面するのはどんな感じなのか。それを我々に感じさせてくれる役者としてトム・ハンクスは最適なんだ。

「天使と悪魔」公式サイト：<http://angel-demon.jp/>

■<http://www.yomiuri.co.jp/entertainment/cinema/topics/20090501et07.htm>

ラテンアメリカ解放の神学

神学とコンテキスト

- 〈誰が〉
 - 〈どこで〉
 - 〈何のために〉
 - 〈どのような〉
- } 神学を必要とするのか。
- 西欧キリスト教の伝統では、真理の「普遍性」が強調されてきた。
 - → コンテキストの軽視

ラテンアメリカの状況

- 過酷な植民地主義の傷跡
 - スペイン・ポルトガルの入植者たちは、先住のインディオたちから土地と文化を奪取し、奴隷化した。
- 北半球（特にアメリカ）に依存せざるを得ない経済システム
- 開発主義（1950～60年代）がもたらしたもの
 - 軍事独裁政権と多国籍企業
 - → 民衆の貧困と抑圧

解放の神学の成立

- 前提としての「民衆」
 - 「キリスト教基礎共同体」における活動
- 第二バチカン公会議（1962-1965年）
 - 教会と現代世界との対話（カトリックの現代化）
 - 諸教会の一致
 - カトリック教会自体の回心
- 第二回ラテンアメリカ司教会議（コロンビアのメデリン、1968年）
 - グスタボ・グティエレス（ペルー）が「解放の神学」を提唱。

G.グティエレス『解放の神学』（1971年）

- キリストは、終末論的約束を霊的なものとはしない。
- J.モルトマンの「希望の神学」を評価。
- 希望は歴史的实践のただ中に根ざしたものでなければならない。そうでなければ、希望は単なる逃避、未来の幻想にすぎない。

解放の神学の特徴

- 聖書を読み直す主体は「民衆」である。
- 「民衆」＝貧しい人々
- 聖書の解釈そのものより、「聖書による」人々の生活の解釈（理解）の方が重要とされる。

「罪」とは？

- 貧困や抑圧などの不正義を（制度化された暴力）による（罪の状態）とした。
- 内面的な罪のみならず、**現世的・社会構造的罪**からの解放と、より人間的・福音的な社会への解放を目指す。
- **マルクス主義**を方法論として用いる。
 - 経済的要因の重要性
 - 階級闘争への着目
 - イデオロギーのカへの注目
- 1980年代、バチカンから、マルクス主義との関係を厳しく批判された。その急先鋒はヨーゼフ・ラッツィンガー（現教皇）。

7

「貧しい人々」の優先的立場

- 貧しい人々＝政治的・経済的な被抑圧者。
- 近年の解放の神学は「階級的」概念を越えようとしている。
 - 「貧しい人々」＝黒人、先住民、女性。
- 貧しい人々を選択するための神学的根拠
 - 神論的根拠：出エジプト記3:7-9
 - キリスト論的根拠：ルカ福音書6:20「**貧しい人々は幸いである**」、7:21-22
 - 終末論的根拠：マタイ福音書25:40
 - 使徒的根拠：ガラテヤ書2:10

8

「神の国」とは？

- 神の国は歴史的解放の中に待望され、受肉する。
- 解放の神学によるイエス理解と、最新の聖書学によるイエス理解は近接している。

9

解放の神学の影響

- フィリピンの反マルコス独裁闘争（1986年）
 - ピープル・パワー革命
- 韓国の民衆神学による民主化運動（1970年代）
- 南アフリカにおける反アパルトヘイト闘争
 - 1990年、アパルトヘイトの終結を宣言。
 - 1994年、マンデラが大統領に就任。

10

解放の神学からの問いかけ

- 「貧しい者」「虐げられた者」から何を学ぶのか。その人々と共感共苦できるのか。
 - 「貧しさ」が持つ（救済論的）意味の探求
- 支配的力を相対化するための方法の模索
 - 資本主義へのアンチテーゼ
 - 土着文化（基層文化）が持つ解放的エネルギーへの気づき
 - アニミズムやシャーマニズム。
 - ラテンアメリカにおけるペンテコステ派の急成長との関係。

11

参考文献

- グスタボ・グティエレス『解放の神学』岩波書店、1985年。
- レオナルド・ボフ、クロドビス・ボフ『入門 解放の神学』新教出版社、1999年。

12